

フィリピン研修イベント

2016年5月17日、フィリピンのNGOであるDAWNを迎えて、演劇形式の講演会が文学部地下大会議室で行われました。DAWNは、日本人の父親を持ちながらも、フィリピンで母子で暮らす一人親家庭を支援するNGOです。DAWNの訪日には、いなくなった父親捜しのほか、日本人にもこうした問題があることを知ってほしいという目的があります。今回は3年目で、安里和晃文学研究科特定准教授が受け入れをおこなっています。文学部にはフィリピン系移民の児童・生徒の学習支援に従事する学生が15名ほどおり、こうした学生が受け入れの主体となつてかかわっています。今年は、約40名の学生が観客として劇を鑑賞しました。以下に、感想文を3点挙げています。

Fさん

第一部で、DAWNや劇団あけぼの、ボランティア活動をしている京大生の話を聞いて、JFC (Japanese Filipino Children) を巡っては、彼らを支援しようとしている様々な団体があることを知りました。第二部の演劇は、とても素晴らしかったです。衣装も精巧で、犬と鶴の二役をしている人もいて、何より、鳴き声や、踊りも、とても上手でした。最後の質疑応答では、JFCの子供たちが、父親に対する怒りもなく、父親に会えた時は本当にうれしかったと言っていて、親というものはやはり子にとってかけがえのない、大切な存在なのだと思えました。劇の中でもあったように、JFCの子供たちは日本にいてもフィリピンにいても、時にいじめや差別を受けることがあるかもしれず、そのことは実際に質疑応答で語っていたけれど、このような差別が日比両国でなくなってほしいと、本当に強く思いました。劇の最後にあったように、JFCの人々が、日本にもフィリピンにもルーツを持っていることを強みにして、これから生きていくことを願っています。今日は、本当に素晴らしい講演と演劇をしていただき、ありがとうございました。

Sさん

クレーン・ドッグの劇を見て、JFCはどちらの国でもいじめを受ける可能性があり、それも原因の1つとなって自らのアイデンティティについて悩むのだと思えました。自分と一緒に暮らせない父親に対しての話を聞く中で、彼らが実父に対して好意的な感情を抱いていると知って少し驚きました。苦労も多かったであろう彼らのフィリピン人の母親からも「あなたはお父さんにそっくりよ」と言われているJFCも多いため、父親の存在というのは彼らにとって怒りを覚える対象ではなく、大切に思えるものなのだと感じました。しかし、私はやはり日本人の父親は、いかなる事情があつたとしても彼らと一緒に暮らしてほしかったなと思います。

最後になりましたが、自らの体験をもとに劇を演じることに様々な葛藤があつたかもしれないのに、素晴らしい劇を見せて下さり本当にありがとうございました。

Tさん

心のこもった演技に涙が出そうになりました。

このお話では父親が母親と娘のことを愛しており、ハッピーエンドで終わりました。演技をしていた子供たちも父親に会いたい、会えて嬉しかった、と皆が言っていたのが印象的でした。子供の状況や心境は一人一人ちがうでしょうし、複雑な思いになる経験も一度や二度ではないかと思いますが、一人の女の子が JFC であることを「unique」なこととして肯定的にとらえているなど、皆が一生懸命勉強に打ち込んで大きな夢を持っていることに、逆に勇気もらってしまいました。この夢を叶えていけるような社会をつくっていくことは、まさに急務だと思いました。本日はありがとうございました。